

第37号緒言

——人文学研究所創設40周年に寄せて——

人文学研究所所長 伊坂青司

これまで人文学は広く人間に関するテーマを掲げて、人文科学と社会科学を包摂する名称として通用してきた。しかし、現代文明の直面する問題群によって、人文学にはいままで以上の課題を担うことが求められている。科学技術文明のグローバルゼーションによって、地球規模の環境破壊や生命の人工的操作など人類の生存を左右する問題が噴出している現代、人文学が広く人間に関する学であろうとするならば、そのような人類共通の課題に関わらざるをえないのである。

そのような現代的状況のなかで、これまでのように西洋と東洋という文化の二分法的発想や「近代の超克」というスローガンだけでは立ちゆかなくなっているといえよう。明治期以降、科学技術文明を受け入れ推進してきた日本もまた、地球的規模の問題に直面し、その解決のために責任を負わざるをえないのである。

そのような課題解決のために、国際的な研究協力が必要であることは言を俟たない。その国際協力はしかし、一元的な価値基準をもってしては実効性は薄いであろう。むしろ、文化の多元性を認めた上で、多様な文化的価値を融合させることこそが、問題解決の有効な方向性ではないだろうか。そのためにも、われわれの足元をなす伝統文化の可能性が改めて見直されなければならない。日本も含めてアジアに属する民族が蓄積してきた固有の文化のうちに、現代の諸問題に対する解決の手がかりを見いだすことは十分に可能であり、そしてまた必要なことである。そのためには、異文化を横断する学際的な研究が要請されるのである。

人文学研究所の活動の中核をなす共同研究グループはこのような要請に応えることが期待され、「日中関係史」「文化のかたち」「西洋文化の受容」「物語研究」「ポストコロニアル・スタディーズの冒険」「自然観の研究」「東アジア比較研究」「スポーツの系譜」「色彩語の社会言語学的研究」「横浜研究」など、個別研究の枠を超えた学際的な研究テーマによって構成されている。またシンポジウムは、近年では「21世紀、アジアの座標軸を求めて」（2001年）、「アジアのポップカルチャーと日本」（2003年）など、アジア地域というわれわれ自身の足元を再認識する試みとして開催されている。これまでのアジア地域を中心にした研究交流を基礎にしつつ、今後はアジアから欧米まで広く視野に入れたシンポジウムを開催していきたい。

2003年度で創設40周年を迎えた人文学研究所は、これまで『人文学研究所報』、『人文学研究叢書』などの出版活動を通して、所員と共同研究グループの研究成果を世に問うてきた。そしてこれから更に新たな課題を担って、異文化の融合する横浜という都市から、未来を切り開く新たな知の情報を発信してゆきたいと考えている。今後とも人文学研究所の活動にご理解とご鞭撻をいただければ幸いである。